

2024年1月

## 課題本 『JR上野駅公園口』

柳美里/著

河出書房新社

2014年

### ◆◆◆1月の読書会から

今月も先月のみんなの感想文を読んで感じたことの共有から始まりました。竹原読書会は会の一週間後が感想文提出の締め切りとなっています。感想文の提出後に感じたこと(書いて終わりではなくその後に感じたことがあるはず)、他の参加者の感想文を読んで感じたこと、書いた後にも振り返ることでまた得ることがあるはず…毎月同じ作業の繰り返しです。この繰り返しで自分を更新していく。書いたら安心しがちですがその後の考える時間を持っていきましょう、ということに参加者みんなで確認しました。

今月の課題本は柳美里の小説『JR上野駅公園口』です。1964年の東京オリンピック開催前年に東北から東京に出稼ぎに来た主人公をめぐる物語。出稼ぎ、東京オリンピック(1964)、ホームレス、東日本大震災…。さまざまな事柄と社会問題を織り交ぜた作品で作者は何を示したかったのでしょうか?参加者の感想もそれぞれで同じ方向に流れることがなくこれだけいろんな考えや意見が出る会も珍しかったのではないのでしょうか。

(文責:森下)

## 2024年1月竹原読書会 『JR上野駅公園口』柳美里

吉川五百枝

主人公が、「ぼく」とも「私」とも名乗らないまま進む作品は、読み始めにちょっと緊張する。今回は、場所の特定が先にあるので、まずはカメラの三脚を立て、見える範囲を探る気分が続いた。三脚の上では、レンズが一人の男性を追う。まるでドキュメンタリー作品の筋立てのようだった。

主人公は、昭和8年福島県相馬郡の農家の長男として生まれた森と言う名前の人だ。

母親から〈おめえはつくづく運がねえどなあ〉と言われた言葉が胸の上に雨のようにしみていく。〈暗闇の中に一人で立っていた。光は照らすのではない。照らすものを見つけるだけだ。そして自分が光に見つけられることはない。ずっと暗闇のままだ。〉この人は、照らされていても光に気づかないで過ごしているようだ。

東京上野公園の一角にあるブルーシートの掘っ立て小屋に暮らすホームレスの一人になったのはこの人が67歳の時。

〈初めから段ボールやブルーシートの掘っ立て小屋で暮らしていた者なんていないし、成りたくてホームレスになった者なんていない。〉作者は、ホームレスになっている人々についてそう説明する。どの人もそうなのだろうか?と思うが、この主人公だってそうなのだ、とその

生い立ちが語られる。

彼は、7人の弟妹がいる家族の中で、その長男という重責を与えられていた。東北地方の現金収入の少ない農家では、出稼ぎによって一家が養われているという現実があった。彼も12才で住み込みの出稼ぎを始めている。3年とか5年とか、あちこち働き場所を変えながら暮らし、やがて故郷に帰って結婚する。

昭和35年2月23日、皇太子殿下と同じ日に息子の浩一が難産の末うまれた。家には、お金はなく、借りる相手もなかった。借金取りが年がら年中出入りし、差し押さえの赤紙だらけだった。それでも、妻がいたし、二人の子もいた。

だが、レントゲン技師になることを目指していた息子の浩一が、21才で亡くなった。自然死だった。一番問題の無さそうな死の形だが、肉親にしてみれば、その若さでの自然死は、どこにも怒りをぶつけて気を紛らすことが出来ず、ただ呑み込むしかない無念の死だったろう。「運がねえどなあ」という誰を責めるでもない祖母の力ない言葉を強調するような作者の意図が感じられる。

主人公は思う。〈浩一の学費 生活費 家族の食い扶持を家にいれるために12才から出稼ぎをしてきたのだ。自分の人生はなんだったんだろう。なんて虚しい人生だったんだろう。泣くことなどでは釣り合わない〉息子の死が納得出来なかった。

浩一の葬儀では真宗の葬儀が行われる。小説の中で、真宗についてこれほど詳しく語られることはめったにない。綿密な取材が窺える。

東北には、蓮如上人以来の福井、富山の真宗門徒と言われる人々が移住していて、真宗が広がっている。宮沢賢治の父が浄土真宗だったのも不思議ではない。熱心な真宗僧侶が東北地方で布教していたからだ。〈真宗では亡くなると同時に浄土に往生して仏様になっから白衣をきせるだけだ。死ぬのは穢れではねえ。お清めの塩も使わねえ〉と述べられている。「門徒もの知らず」と蔑まれても、〈どれだけいじめられても、親鸞聖人は「念仏者は無碍の一道なり」といわれて前を邪魔さいるごどはねえ。我が身に起きたごどを真っ直ぐ受け止めて生きていく〉と真宗の本筋を書き記す。

もう誰かを養う必要がなくなっても、ブルーシートで暮らすようになって、生きていかなければならない。浩一の訃報が入ったあの日のことは、封印してもこぼれ出てきた。非情な時は過ぎない。何度か自死を考えた様子が感じ取れる。

67才。すべての縁者を切り捨てて、彼は上野公園に戻ってきた。ホームレスとして生きる事を選んだのだ。死に場所を探してくたびれ果てて5年間、そこに居ついてしまったと言う。

東京で大阪でホームレスを襲撃する少年グループのニュースが聞こえる。皇室行事があるときは、ホームレスの掘っ立て小屋は畳まれ、住人は「山狩り」と称されるように追い立てられる。〈どんな仕事にだって慣れることができたが人生にだけは慣れる事ができなかった。人生の苦しみにも、哀しみにも……喜びにも……〉

皇室行事があるたびに、上野公園に暮らすホームレスは追い立てられる。「特別清掃」で清掃される狩られる人なのだ。この人達の対極にある人の象徴として、皇室の人々が上げられている。狩られる人と対比するのは〈挑んだり貪ったり彷徨ったりする事を一度も経験したことのない皇族方の人生。〉であり、〈天皇ご夫妻の、罪にも恥にも無縁な唇〉と光の当たる側を書き表す。天皇と同年に生まれた主人公。皇太子と同じ生年月日の息子という親近感の

ありそうな条件設定の親子だが、対比的に光に照らされない存在として描かれることになる。

さらに、〈オリンピックの「感動」や「熱狂」〉という光輝く社会状況も「光の当たらない人」の対比として度々出てくる。繁栄を象徴するオリンピックだが、出稼ぎの労働者には、日銭稼ぎの働き場に過ぎない。それらの説明に、ラジオのニュースの言葉や、国会答弁の言葉遣いが太字で印刷されていて臨場感に溢れる。作者のこういう表現様式が、ドキュメンタリー風とを感じる所以かと思う。作者は、倫理観も付け加えず、何が世の役に立つかと主張もせず、冷静に描写し続ける。

地震が起きようと、津波が人を呑み込もうと、日常は何事もなかったかのように続く。最終行では、変わらぬ上野駅公園口の番線案内のアナウンスがながれる。

ゆく川の流れは絶えず、同じように見えるが、川底の水流がどんなに複雑に絡みあっているかは、目を凝らさなければ見えない。光の当たる人と当たらぬ人の対比も、流れに乗っていけば簡単に区分けしてしまう。上野公園に暮らす人々も、ホームレスという一語で括ってしまい、500人の500通りの生き方に分け入らなくても済む。

作者は、何かを解決するために小説を書いたのではなく、生きる一場面と別の一場面を蝶番のように繋いで、連続したものとして小説を仕立てたようだ。

「文芸」と呼びたくなる構成や手法を考えていると、何故自分は作者によってそう感じさせられたのかと、自分が受け身となる伏線を考えてみたくなった。……たまには、作者の手の内を推し量ってみるのも……。

## 『JR上野駅公園口』を読んで

### ◆【TK】

最近読書会で読んだ、おもかげと夢見る帝国図書館という本と少しだぶっている。鉄道のホームとか上野公園、戦後の貧しいイメージ。

どうもホームレスが主人公のようだ。それにしても身をこなにして働いても報われなかった人生でした。希望の見えない小説です。

天皇が上野公園を通る行事 天皇の家族の誕生日 オリンピックとか華やかな行事と対比させている。

柳美里さんは韓国に関係した方のせいかいじめにあった人生が少しあったようだ。虐待とかに関するテーマで色々作品を扱ってもきている。

高度成長の日本のなかでも解決できていないことが沢山あったのです。

どうして兄弟は普通の生活ができたのに自分だけ稼ぎ手として頑張ろうと思えるのか？疑問に思いました。

自分さえがまんすれば家族が幸せになれるかも？と思ってひたすらホームレスをかくして普通に東京で働いていると思わせたかったのでしょうか？私は家族は皆で助け合うべきだと思います。そして頑張ったのなら老後は故郷に帰って親族に世話になってもいいと思うのです。

遠慮なのかそれとも自尊心のなさなのか？と感じてしまいました。例えば、社会ではノーメイクは本人がよくてもまわりにマナー違反と考える人や会社もあります。ホームレスの生活もまわりの人から見たらこれにあたるのかも知れないと思いました。自尊心と最低限の品位は持たないと本人も人生を楽しめないと思います。自分はこれで良いからとわりきれてもまわりは不快なこともあります。

家族皆で幸せになりたい。

それにしてもこの時代にしかわからない社会の要素があったかもしれません。

16 ページになけなしの 3000 円で故郷の子供と遊んで幸せを感じながらもつらい気持ちが胸にひしひしと伝わってきました。親ってこうなんだな。子供が喜ぶ事をしたいんだ。やっぱりこうだね。とじーんとききました。

生きていくことが大変なことはいつの時代にもいろんな立場であります。震災で家を失った人に家が与えられますように。

## ◆【 T 】

「まもなく 2 番線に池袋・新宿方面行の電車が参ります。危ないですから黄色い線までお下がりください」

このアナウンスが、P7 と P172、P177 に 3 回出てくる。一回目のアナウンスの後、男性は飛び込み自殺を図ったようだ。はっきりとは書いてないが、〈心臓の中で自分が脈打ち…真っ赤になった視野に波紋のように…〉〈騒がしく熱く痛くなって、何にも考えられなくなって…ずたずたに引き裂かれたけど、音は死ななかった…〉などの文から想像できる。人は死ぬとき走馬灯のように過去の出来事を次々と思い出すという。

彼が思いだしたことは、わずか 12 歳で働きに出て、家を支え結婚後は関東に出稼ぎに行ったこと。家に帰るのは盆暮れ 2 回のみ。20 年間の結婚生活のうち家で暮らしたのはわずか 1 年余り。親・兄弟・家庭を支えるため、50 年働き続けたこと。しかし、親を見送り、息子の死・妻の死を経て孫娘の麻里が彼の世話をしてくれるようになったが、麻里を自分とこの家に縛るわけにいかないと考え、黙って又関東にもどってきてホームレスになったことであった。

そして、二回目のアナウンスの後、彼の魂は過去にさかのぼり故郷を俯瞰する。そこで、東北大震災に巻き込まれ波に引き込まれる孫娘の麻里を見た。

一生懸命働いた結果が、ホームレスであり列車への飛び込みであるというのはやるせない。孫娘の麻里を思い負担になってはいけないと家を出たが、彼は当時 70 歳前後、人に世話してもらわなくても十分一人で生活できる年ではないか。もちろん麻里のことも考えたであろうが、長く出稼ぎをして、家とか家庭になじまなかったのかもしれない。故郷は懐かしいし心から消えることはないが、自分の居場所ではないように思い再び上野に戻っていったのではないだろうか。

## ◆【 KH 】

まるで、社会派のドキュメンタリー番組を見ているような、しかもかなり気持ちの滅入る、寒々しいホームレスの方々の描写が、淡々と続いて行く。。。ますます、感想文のハードルが高くなるなあ、というのが正直なところでした。1980年代前半の上野公園には何回か行ったことが有る。こんもりと茂った植木沿いに、巧みに作られているブルーシートの“家”どちらかという目と目を背けてそそくさと通り過ぎた記憶しかない。若い当時は、人生を降りてしまった人々 というような認識しか正直なところ持たなかったように思う。いやこの本を読むまで、あまり変わらないかもしれない。

大阪のあいりん地区取材したドキュメンタリーを見たときに、大阪の場合は、万博の突貫工事のために、地方から駆り出された人々が、その後職を失い、帰るところも失い、そのまま住み続けているというような、内容だったと思う。オリンピックや、万博、発展を続けていた戦後から80年代、もっとかな、の日本を陰で支えていたのは、この人々の働きなのだ。光の部分には目が行くけれど道路も建物も誰かが汗を流さなければ出来上がらない。そんな当たり前のことに今更ながら気づいた。でも気づいたで終わっては、感想文にならない。

人は、誰かのために頑張る、人のためならば頑張れる。家族のために、辛い労働も、寂しい日常生活も厭わず、家族の団欒や、何より癒されるはずの子どもの日々の成長を見ることもなく、行き着いたのは、それらの守るべき家族との別れ。誰かにあてにされるといことは、重荷に感じることもまああるけれど、とても幸せなことなのだ。

自分の時間が欲しいとか、自分のために生きる(自分を大切にすべき)とかとか。自分自分というけれど、それじゃあ、かつちゃんにとっての“自分”とはなんなのか？死ぬのは怖くない、でもいつ死んでしまうのかわからないままに死んでしまうのが怖い。ラストシーンは、電車で飛び込む？いや結局かつちゃんは人生を自ら断つことをも拒まれ、生き続けるのかなあ。全然結論が出ないまま、もうしばらく、考え続けるような気がしている。

## ◆【 望月悦子 】

私は、詩・小説・戯曲など、言語表現による芸術には作者の意図や狙いがあり、それを読み解くことの面白さをいつも考えていました。しかし、今回の課題本はそうではないことが例会特に吉川先生のお話から理解でき驚きました。著者は韓国籍で、戯曲、演劇関係などの劇作家であり小説家でもあります。先生は「この本は話の筋は単純で、文体を楽しむ本だと思ふ」とおっしゃった。文体とは作家の個性や思想が表れ、作品に特色を与えるものだと言われていますがこの作品の特色は、ドキュメンタリーの形式をとって並列に展開することで、読者は何を感じたのかを求めているのだと。作者の思いを受動的ではなく能動的にこの作品を読み解くことに特色があるのだと考えたのです。そのために労働者の生き方と天皇の生き方の対比とか、ホームレスの具体的日常生活とか、ラジオやニュース、国会答弁などの会話これらは太字でわざわざ強調させていますが、これらも読者に多様な情報を提供して「あなたならどう考える」と突き付けているようにも思えます。例会では、光と影という言葉も出てきました。「何を光と言ひ、何を影と言ひのか」ホームレスの生活を影・天皇の生活を光と思わせて

いますが、それを読んでホームレスの生活に同情したり憤慨したりするだけでいいのかと思えました。ノンフィクションなら、社会情勢をドキュメンタリーとしてありのままの実態を主観を交えず詳細に見た通りを報道する責任を伴います。が、この課題本は小説家の作品です。主人公は自分のことより家族のために尽くすしかなかった生活が、苦労ばかり多いみじめな不幸な生活だけであっただろうかと考えました。家族のために自分の力で幸せにできることが一方では喜びになっていたのではと考えていると、「無償の愛」という言葉を思い出しました。一般的には「無償の愛」とは見返りを求めることはせず、相手のために尽くす愛情のこととされています。心理学的には「見返り無く助け合える関係は、お互いのことをなくてはならない、唯一無二の存在として認識していること」とある。主人公にとってそういう家族のために尽くしているだけで、何も自分を犠牲にしているわけでもないのではないだろうか。そのように考えてみると、どうやって光を見つけどのように生きていくかによって幸福・不幸は分かれるのだと思うのです。

ホームレスの中には、高学歴・一流企業・裕福な生活をしていても生きづらさから逃げ、光を求めて自由を大切に生活している人もいるように聞きます。皇族の秋篠宮家の長女もまた、大きな社会問題や家族の苦難を起こしながらも、自分の光を求め日本から逃げ出して新天地で自由に自分らしく苦労も苦難も伴いながら生活を始めているのではないかと思うのです。

著者からの「あなたはこの本から何を考えましたか」の問いに対し、ホームレス＝東北出身者＝出稼ぎ労働者＝上野駅公園＝影の生活などの一連を社会情勢として表面的に考えるのではなく、一人一人が自分の足元をしっかり見つめ、自分にふさわしい光を求めあるいは光に気づき遅く生活することの重要性を痛感しました。また、経済的格差は激しくなり、昭和の時代より豊かになってきているのに、欲望を追い求めるのが当然のような生活に満たされ、それに慣れてきている一方、社会的には効率を求め分け与え合うことが欠如しているような心の貧しい人間も多くなってきているのではないのでしょうか。「無償の愛」という言葉も死語になっているのでしょうか。そういうことを考えさせてくれた課題本でした。

私は上野恩賜公園の美術館などの一部しか行ったことがなかったので、準備くださった地図によって一層ホームレスの生活の姿が現実化できました。担当者のご苦労に感謝です。

#### ◆【 MM 】

今月の課題本『JR上野駅公園口』はいくつかのエピソードがちりばめられているがつかみどころがない小説だった。戦後の東京オリンピックの頃出稼ぎで東京に来た主人公。オリンピック特需で働き口には困らなかったが働き通しで家族と過ごした時間はほとんどない。息子を若くして亡くし、その後妻にも先立たれたあと、孫との生活を棄ててホームレスになった。物語の終盤には東北大震災が出てくる…。

主人公は生きていいのか死んだのか。読み手の私はどう感じたのか、という視点で考える。死んだのかもかもしれない。生きていたとしても死んだように生きていることだろう。漂うように、地に足がつかないようなふらふらとした感じで。家を持たない、ホームレスの仲間にも深入りし

ない。小説の中で印象的に繰り返される駅員のアナウンス、これも実際のアナウンスの場面もあればもはや主人公の脳内だけで流れるアナウンスかも知れない、ととれるような書き方。

読書会時には主人公は死んでいる、という意見があった。その時には私は死んだとは言いきれないと思っていたが、その後話を何周か読むと、死んでいるのかもと思えてきた。終わったという表現や、主人公とすれ違う女性に「目撃しないで済んでよかった」という表現。明確に死んだということを書かないことに対して孫は津波に巻き込まれて死んだときっちり書く。孫の最後と主人公の置かれている今(というかその時のこと)との境目がいつもはっきりしていなくて、グラデーションのようにいつの間にか孫から主人公、死から死に向かうこと(死んだかもと匂わせる、または生きていないかもしれないと思わせること)への表現がうまいと思ってしまった。

読み易い小説を好んで読んでいたので今月の小説は難解だった。こういう作品が文芸作品とか純文学と呼ばれるのだろうか。文芸とは言語によって表現される芸術、純文学とは小説、戯曲など美的感覚に重点を置いた文学とある。純文学への苦手意識から手に取ることが少ないが、課題本となればそうはいかない。頭の中で感じたことを感想文に起こすのに今月はとても骨が折れた。頭の中の感覚を言語で表すのは本当に難しい。これを小説家は生業としているのだ。課題本を理解するのは難しかったが、何周か読むと見えてくることがある、感じることもあるという経験は楽しかった。一人読書ではこうはいかない。一度読めば終わりだからだ。課題本を読む→感想を共有する→感想文を書く→提出された他の感想文を読んで感じる→また自分で考えてみる…先生が大切とおっしゃるこのサイクルを止めることなく続けていきたい。